



# おなかの底からの「お疲れさま」が気持ちいい。

をした仲間のごは忘れられないだろう。

## 2月14日(土) 第4日目

早番なので、朝8時のバスに乗らねばならない。ご飯を食べて、コーヒー代わりに野菜ジュースを飲んで、出発。9時にはSHVに到着する。前日が遅番で早番の日は、結構キツイ。開館は10時から、できればもう少しと遅らせてくれたらいいいなあ。

この日は、あまりにお客さんが少ないのでちょっと拍子抜け気味。そこで、空いた時間を利用して、共有スペースでやっているお茶のお点前サービスに参加した。

## 2月15日(日) 第5日目

午前10時56分発。信濃本線小諸行きに乗った。目的地は選手村。篠ノ井駅のひとつ手前の今井駅にある。バスをのり、金国探知機を通り、名誉村長室へ。そう、今日は近衛さんに選手村を見せたい。さき、今日は近衛さんをお話のうかがうことになっている。部屋で1時間ほどお話しし、選手村を歩くという貴重な体験をさせていた。いた。

このように、駅で電車を待っている間、カナダ人の女性4人組と仲良くなった。話しを聞くと、なんと彼女たちはカナダで一番人気のアイスホッケーとショットトラックの選手だった。ベッキー・カーロートさんを始め4人と美人ではっさりしており、防具を付けた印象とはかけ離れている。後日、彼女たちは銀メダルを獲得した。

午後3時40分、SHV入り。ボランティアとしてここに来た人たちは、参加した喜び



●選手村の廊下に出会ったカナダの女子アイスホッケー選手たちと。アイスホッケー人気が高いだけに、プロマイドなども別けてしばらくなって、今度は彼が奇で、彼女たちにまた運送してビックリ。下の写真は、そのなかのひとりだったゴールキーパーのキャシー・キャンベルさんのお母さん。



## 2月9日(土) 2月12日(水) 東京にて 2月13日(金) 第3日目

一夜明けだが、疲れがひどく仕事にならない。昼も夜も、人目が途切れることなく、体を休めることができなかったためだろう。結局、大層目ごろまで、体がバリバリでどうしようもなかった。

午前10時36分発あさま509号にて、再び長野へ。この日も満席。軽井沢上田間では道路に立っている人も多かった。そのほとんどが外国人というのも珍しい光景だ。

今日も駅の近くには外国人の大药房がたむろしている。人だかりができていたのは、たいていビン・トレッド(交換)かビン・パッジを売る人の前である。こちらも98%が外国人。みんな片言の英語、日本語で交換や売り買いをしている。その後、中央通りの権堂アーケードへ。秋葉神社で無料サービスしていたお汁は、ホントおいしかった。

長野駅バスターミナルからシャトルバスに乗って午後3時40分頃、SHVに到着。

セントラルスクエア(表彰式会場の)場所や催しを聞かれたので、さっそく中央通りでもらったばかりの地図で説明すること。ところが、認定のオフィシャルマップで説明するだけでなく、この御達し、説明するために見せるだけなのに、これはスポンサーがらみのことか。

夜10時半、宿に戻ると、随分、新しい人が増えていた。先に帰った人たちは、ノートにメッセージが書き残されていた。短時間しか一緒にいなかったが、とても貴重な経験

何かの役に立っている充足感からか、皆温かい。すれ違う時、おなかの底から「お疲れさまです」といい交わす。同じボランティアというだけで交わし合える、不思議な感覚。声に出し合う挨拶が、こんなにも気持ちのいいものかと実感する。その晩、宿の風呂場を見上げると「洗心」の額が。ここでの経験はまさに「心を洗ってもらっている」みたいだ。

## 2月16日(月) 第6日目

胃痛のため、昼前まで横になり、3時にSHV入りした。今日は、韓国企業のゲストが多い。彼らほとともフレンドリーで、片言の英語で話しかけてくる。韓国語は「アニャガセオ(こんにちは)」「カムサハムニダ(ありがとう)」。ぐらいいし知らないが、彼らの目は優しくかった。ボランティアには、関西からの人も多い。経済的な負担も大きいのに自ら志願した理由とは、多分、こういう優しい視線に出会って世の中、捨てたもんじゃない、と思えるからではないだろうか。

ボランティアは時間が余っている人がするもの、というイメージがあるのは、残念なことだ。私は、ボランティアとはより高い自己実現のためにするものだと思っている。仲間たちは、3年前に登録した時から、ここに来るために、時間をやりくりして駆けつけている。社会的地位の高い人ほど、仲間と一緒に汗をかくことをお勧めしたい。肩書なしに

ひとりの人間として多くの人に触れ合う機会、得難い経験をもたらしてくれと思う。

## 2月17日(火) 第7日目

今日はジャンプ団体の日。皆、期待でいっぱいだ。早番のため、8時20分のバスに乗るが、なぜかいつもいる添乗員もいなかった。

インフォメーションカウンターの前には、32台のテレビがあるが、音は消されている。企業ブースから歓声が聞こえると、勤務中にもかかわらず気づかずにやって仕方がない。榎澤さまに駆け込む始末。テレビ画面に、倒れ込んだ船木と原田の姿が映し出された。勝ったんだ。通りがかった人たちから「Congratulations!!」と声をかけられた。あちこちから聞こえてくる歓声と興奮は、今、自分が彼らと一緒にNAGANOにいるという幸せを噛みしめているように聞こえた。

午後3時32分。東京行きの新幹線がホームを離れた。私の長野滞在は今日で終わり。パトナタッチで、娘の美紀(学習院女子大生)が今日の遅番から入る。22000分の1でも、何かしらお手伝いできたという満足感はある。オリンピックとは別登録とは知らずに、パラリンピックのお手伝いができなくてしまったのは心残りだが、我を忘れて感激にひたつた素晴らしい1週間だった。NAGANOオリンピック、本当にありがとう。



●ボランティアを終えて、NAOCより「ボランティア参加証」というものをいただいた。思いがけない記念の品だ。